「犬猫怪話竹箆太郎」と「南総里見八犬伝」と

横山邦治

一

文化七年庚午孟春発兌（注一）

江戸書林　西村源六
京都書林　伏見屋半三郎
大阪書林　勝尾屋六兵衛
　　山田屋嘉右衛門
　　富田屋清蔵
　　秋田屋太右衛門

という、三都六書肆合板の刊記を有し、巻一の内題に、

犬猫竹箆太郎巻之一　栗枝亭鬼卵述

また巻五の巻末に、

繪本竹箆太郎巻之五　大尾

ともあり、「犬猫竹箆太郎」もしくは「絵本竹箆太郎」と呼ばれる上方の読本がある。（注二）

文化六年己巳春日とある〃阿州　吉田鶴撰〃（注三）の序文につづいて、展開期読本特有の目録及び登場人物の繡像あり、さらに次のごとき自序がある。

○四國に竹箆太郎てふ犬ありて妖魔を退治せし事色々の説ありて其実をしるものなし頃日京摂及京都の諸名君各々筆を揮ふて復讐の種々古きをもて新らしき作を出し給ふ中に独此竹箆太郎は犬の復讐にして諸名家の粮を喰わず真の竹箆太郎なるものならんと誌すは　栗枝亭鬼卵にそありける

これにより、内容は竹箆太郎という犬の復讐話であることが判るが、巻一の冒頭は次のようである。

○按察中納言の乳母の姫犬に嫁する話

後漢書に曰昔、高辛氏の時犬戎國したがわず征伐すれども勝事あたわず因て天下に觸れて犬戎の大将呉将軍を殺すものあらば黄金千〆邑万家又少女を賜ふて妻とせんと宣ふ時に毛の色五彩なる犬あり槃瓠と号く此犬一ツの首をくわへて禁庭に蹲る群臣異んで是をみれば呉将軍が首なり帝大に悦給ふ然れども是に妻すに女をもつてしがたし又封爵の道なくいかにして報ぜんと僉議區〳〵ニオ　挿絵―高辛氏のこじ―ッ〳〵ニオなるところに御女聞給ひ皇帝既に詔を下す再び変ずべからず我行んと何ありければ帝已事を得すして姫君を槃瓠に

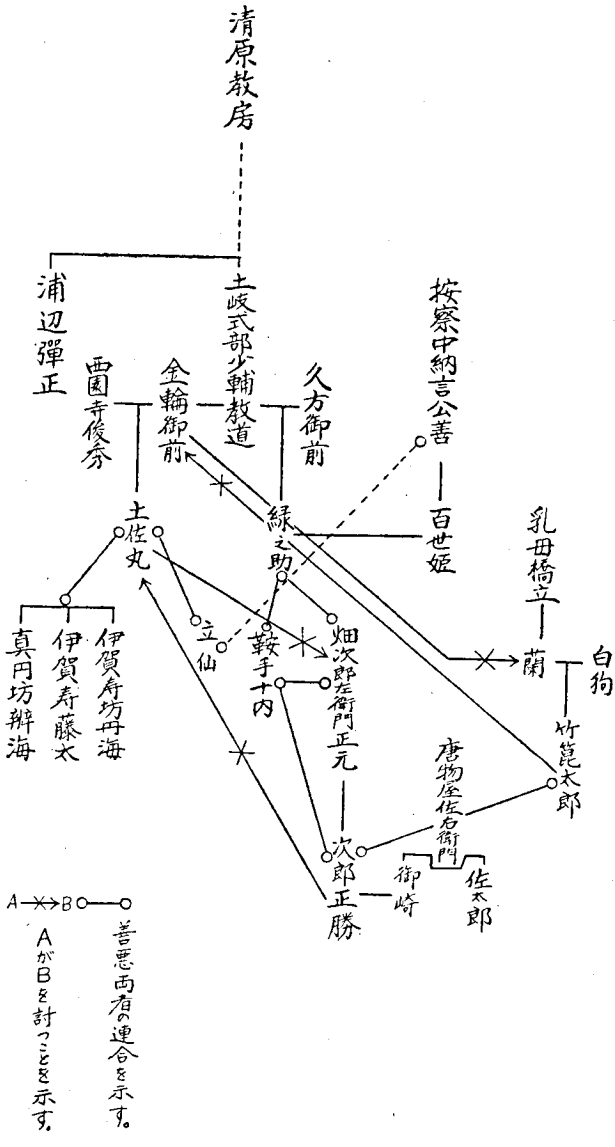
妻し給ふ蛟瓠女を得て負て走り南山石室の中に入りぬ人跡絶て在所をしらず三年を経て六男六女を生り因て自夫妻となる事をしる其母後に此由を帝に告たり是によて諸子を迎へて見たまふに言語分たず郷里に住ことを嫌ひ山霧に入ことを好む帝其意に随ひ名山廣澤を賜ひ今の長沙武陵の蠻是なりとぞ我日の本にも是に均しきことあり

これによって、竹篦太郎の話に、高辛氏の故事が作者の脳裏にあり、それが何らかの影響を与えて筋立が作られたことが予想されるが、次にこの読本の梗概及び主要人物の系統を示す図をしるす。

按察中納言公善卿の息女百世姫の乳母橋立は、娘闌が庭先に粗相した屎を始末してくれたら娘成人後嫁入さすと飼犬白に約す。闌成人後夜ごと狂気するが、幼時の約を果さざる結果と知り高辛氏の故事をひき、犬に従うことを決心する。白衣の男夜毎通ひ姙娠、橋立悲しんで闌に恋慕する樺島兵庫に白を殺すことを頼む。兵庫白の首を落すが、その首兵庫の喉に喰いつき殺す。闌黒白まだらの犬を生む。これが竹篦太郎である。一方伊豫土佐両国の太守土岐教道は、家督相続に必要な三種の宝①弘法大師の真筆②金花短冊③隠形の御劍を、軽卒にも側室金輪御前に①（金輪御前の誠意を疑い、偽筆を授く）、弟浦辺弾正に③、家臣に②を分置するが、教道はそれを悔い忠臣畑正元に嫡子緑之助と按察中納言の息女百世姫との婚姻をすすめて家督相続させることを頼んで死ぬ。正元はその死を公表せず婚姻をすすめる。闌は犬を放して橋立とともに百世姫に従って四国に下る。婚儀の席で教道の死が暴露され、金輪御前、弾正、緑之助の間に相続争いが起る。その時金花短冊盗まれ正元賊に殺さる。

緑之助　正元の遺言に従い、忠臣鞍手十内と正元息正勝を求め、本物の弘法大師真筆を持って出奔する。金輪御前（前夫は天下を望んで果さなかった俊秀卿、遺言に従って息土佐丸に天下を取らさん手始めとして土岐家横領を謀る猫の化身、土佐丸に妖術を授けている）は百世姫をあずかる。（巻一）闌は金輪御前の本体を見破り喰い殺さる。一方誅言容れられず浪人した十内は、先に弾正より隠形の御劍を奪ひ、旅の途路与左衛門淵にて人身御供の女人を喰う猫（金輪御前）を主領とする獣類の怪異を見る。猫は竹篦太郎の恐ろしさをいう。さて姫は橋立の犠牲によって脱出するが、土佐丸の妖術にかどわかされる。が、持仏の加護によって妖術は破られ、犢ほどの犬が姫を連れ去る。先に短冊を盗んで正元を殺した土佐丸は、弘法大師の真筆の偽物を作った医師立仙と謀り、俊秀卿が宮中より盗み出していた内侍所の鏡をあずける。身近にあると妖術が使えないからである。（巻二）盗賊伊賀寿円海は弟弁海と謀って緑之助を捕ふ。十内山賊退治、緑之助救出、円海逃る。一方土佐丸は妖術を使って弾正をたばかり自害させ、競争相手を一人倒す。その頃犬即ち竹篦太郎の手引きによって緑之助・十内は正勝に会い、太郎に救われていた百世姫、緑之助と再会。この竹篦太郎は闌の霊が我子なりと正勝に送ったのである。（巻三）伊賀寿兄弟は土佐丸に仕え、弾正死後の長岡城代となり、土佐丸の野望は着々と進捗する。内侍所の御鏡盗難のため、按察中納言と安部保清は四国に赴くが、中納言病んで立仙にかかり土佐丸に捕われ、保清は太郎を介して緑之助等に会う。保清は金輪御前・土佐丸の妖術をくじく策を授く。（巻四）正勝の妻御崎の兄佐太郎は、桜狩に出かけて猫殷の怪異に遇い、命からゞ逃げ出す。御崎は父庫物屋佐右衛門の力を借りて妖術を破る

策を実行するよう勧める。皆々土佐丸の居城に赴き、謀をもって土佐丸に加担のようによそおっていた立仙も加わり悪徒討伐、太郎は母閨の仇猫股の金輪御前を、正勝は父の仇土佐丸を討つ。伊賀寿兄弟も亡ぼさる。そして内侍所の鏡も朝廷に帰り、緑之助は土岐家相続、忠臣十内・正勝もとりたてられ大団円、太郎の行方は杳として判らない。犬か神か。



（絵本竹篦太郎の登場人物系統図）

これを要するに、古くからの竹篦太郎のはなしをもとにしてお家騒動に仕立てあげた読本といえる。この竹篦太郎の話についてはその原拠を知らぬが、犬人婚姻譚の部分は、今昔物語にも巻三十一の「北山、狗、人為妻語（ラメトセルコト）第十五」と見え、また犬の報恩譚の部分は、同じく今昔物語巻二十六「美作、國、神、依猟師謀止生贄語第七」を初め数例指摘でき、古くから類似の説話が存在していたごとくである。

日本昔話集成第二一部（関敬吾編）1の一〇六犬聟入の民話は、本格昔話犬人婚姻譚部分が娘の尿の不始末から生じているところまで一致している。また同集成第二一部本格昔話3の二五六猿神退治の民話は、犬の名前が竹篦太郎で一致し、化物退治の相手が猫と猿の違いはあるが、その他の部分、巻二で十内の遭遇した人身御供と獣類の怪異などは一致している。更に構想の上では挿話とも感じられる保清が猿の群に苦しめられるところ（巻四）は、猿神の民話と一脈通じあうし、佐太郎が猫股屋敷にまぎれ込む部分は、前出集成の二三一猫又屋敷の民話と一致している。

近世における竹篦太郎を題材とした先蹤作として黄表紙「補執柄太郎」三南杣笑楚満人歌川豊国画寛政八年刊　を見ることができるが、これは全く民話調のはなしである。冒頭の犬人婚姻譚はなくて、母犬を狼に殺された太郎が太郎介母子に育てられ、母の仇狼を喰い殺す話が冒頭部分で、次いで前述猿神退治と同一の話が展開する。相手が猿でなくて狼ではあるが―。（注四）

この黄表紙と日本昔話集成の例とを並べてみると、しっぺい太郎のはなしにはもともと犬人婚姻譚は附随していなかったのではないかとも考えられるのである。とすれば、この読本「怪話（大猫）竹太郎」は、読本で常套的に用いられていた中国種の飜案という点で高辛氏の故事に思いを寄せて日本古来の民話である犬聟入を採りあげ、しっぺい太郎の登場する猿神退治に結びつけて、それを更にお家騒動という一層読本的世界に持ち込むことで成立した作品といえるのではなかろうか。

今不用意にお家騒動と読本的世界という言葉とを結びつけて用いたが、文化七年という時点においては、すでに絵本もの（注五）にも「絵太雪鏡談」十二連水春晩斉画作文化三年刊、「絵本金花談」十五同画作文化五年刊　という純然たるお家騒動もの（注六）が見られ、本格もの（注七）にも「桜姫全伝曙草紙」五山東京伝作歌川豊国画文化二年刊、「三七全伝南柯夢」六曲亭馬琴作葛飾北斎画文化五年刊　など出自こそは各々異なれ、極めてお家騒動的要素の強い作品が数多く見られ、お家騒動というテーマは仇討などと共に十分読本的世界を形成するものとなっていた。

いずれにせよ、ここに十全に本格的読本といえる「犬猫怪話竹太郎」なる作品があった。

二

曲亭馬琴畢生の大作「南総里見八犬伝」の構想は何時樹てられたか、それは知らない。が早く文化五年出版の「俊寛僧都嶋物語」後編に「里見八犬士異伝」なる新刊予告があり、作者都賀庭鐘によっても文化八九年には相当程度の想はねれていたごとくである。（注八）しかし実際に執筆を始めたのは文化十一年正月であることは、回外鵜筆に

○文化十一年甲戌の春正月下澣。本傳の作者曲亭主人。
這小説を綴るが為に。案を拭ひ硯に呵して、将新研を開まくす。

とあるによって明らかであり、第一輯序によれば九月十九日に原稿を書肆に渡し、更に

○是年甲戌文化冬十二月。八犬傳　第一輯十回五巻。刊行の書賈。山青堂発販す。

となっている。こうして陽の目を見た八犬伝の第一輯及び〃其明年の冬。第二輯五巻〃出板の、その巻二にいたる〃一部小説の開場、八士出現の発端〃の部分は、八房伏姫の犬人婚姻譚であって、これが八犬伝全体の因果を統べる役割を果していることは、今更言を俟たない。

ところでこの八房伏姫の話は、作者自身、第一輯序に〃如三伏姫嫁二八房一。倣乙高辛氏以二其女一妻二槃瓠一。〃といい、再識して〃唐山高辛氏の皇女、槃瓠（犬の名なり）に嫁したる故事に倣ふて。個小説を作設〃たとし、更に本文挿絵部分に高辛氏の故事本文を援引していることによっても、高辛氏の故事をふまえて構想を樹てていることは明らかである。

犬夷評判記中巻にすでに指摘され、多くの先人が説くごとく、この八犬伝の発端は水滸伝の発端をふまえており、更にまた作者自身〃里見記・里見九代記。房総治乱記・里見軍記〃など〃坊間〃の〃寫本〃である軍記類、更に地誌としての〃中村国香の著せし、房総志料五巻〃をも挙げ参考にしていることをいうごとく、俗間の軍書類その他をもふまえ、「群書字考」に見える「里見八犬士大山道節。犬塚信濃。犬田豊後。犬坂上野。犬飼源八。犬川荘助。犬江親兵衛。犬村大学」の名前に附会して想を樹てていた。

これを要するに、里見家の興亡に興味を抱いた馬琴が里見家に関する軍書類や房総の地誌に関する群書をさぐって史伝ものとしての基礎知識をかため、馬琴が江戸の説本の鼻祖と仰いだ建部綾足の「本朝水滸伝」一〇安永二年刊（注九）以来常用された水滸の飜案として水滸伝発端の趣向を模し、それに高辛氏の故事を附会して八犬伝発端の構想を樹て、〃国字の稗史〃（注十）とせんとしたのであろう。

ところで、八房の出自に関しては、淫婦玉梓の怨念の転生したるものとしているのであるが、第一輯巻四に、母犬を狼に喰殺された雛狗が狸に養われて成長し、その奇事を聞いた里見義実が伏姫のために飼育することになったとする。母犬の仇を討つ話こそないが、黄表紙執柄太郎の発端と類似し、極めて民話的発想といえようか。

八犬伝第六輯巻之五上冊から第七輯巻之三に及ぶまでは、犬村角太郎礼儀が八犬士の一人として登場するまでの話が説かれている。その梗概については、内田魯庵執筆の「八犬伝物語・中」（注十一）や日本文学大辞典の中に見られるものにゆずるとして、要は下野国の赤岩庚申山の洞内に住む山猫が角太郎の父赤岩一角を殺して一角に化し、後裴裕虫ともども悪行を重ね、最後に角太郎に父の仇として討たれるという話である。

この話が一段落したところで馬琴は、〃曲亭主人曰〃として注記し、山猫に関する諸説を挙げ、最後に次のごとく注する。

○…人家の老猫化してその家の老母となり、或は食事を人に見せず。

或は竊に。行燈の油を舐れるなンどいふ物語はことふりにたり。山猫の怪談は、聊等類を遁れたるのみ。……

さすがの馬琴も、人口に膾炙し使い古された化猫退治の怪異譚の焼直しは面はゆく感じたのでもあろう、山猫にすがって自己辯護をする。しかしこの辯によっても、また犬飼現八に眼を射られた山猫が一角として病臥するところなど、馬琴の脳裏に民話的発想が強くよぎったことは確かであろう。（注十二）

前述八房出自の話、八房伏姫にまつわる犬人婚姻譚、そして化猫退治の怪異譚と並べてみると、素材的には「犬猫怪話竹芒太郎」と酷似していることに気付くであろう。

三

「犬猫怪話竹芒太郎」の作者栗杖亭鬼卵（注十三）の伝記については岸得蔵氏の御論考がすでに備り（注十四）、またその読本についての概略はすでに述べたことがあるので（注十五）、詳細はそれにゆずるとして、要は、遠州日坂に住して上方の読本作者として活躍した鬼卵は、上方出版書肆が江戸の読本盛行に対抗して出板した絵本ものの風を受けながらも、江戸における読本に近ずかんと趣向に腐心し、一応の成果を挙げた人というのであった。当然鬼卵は江戸の読本作者の下風に立つことに甘んじており、馬琴や種彦への入門さえ願っていたという。（注十六）まして自作の読本が江戸の読本へ影響するなど考えてもいなかったであろう。

ところでその鬼卵の読本「犬猫竹芒太郎」と馬琴の「南総里見八犬伝」とを並べてみると、出板年次において文化七年と文化十一年という差があり、例の同一素材・趣向を鬼卵が馬琴から仰いだとはいえないのであって、逆に馬琴が鬼卵から素材、趣向の点で学んだ可能性さえあるのである。しかし馬琴が果して鬼卵の読本を読んだかどうか、今立証するすべを知らない。

八犬伝とほとんど同時に執筆出板した「朝夷巡島記」初輯五歌川豊広画文化十二年刊　を大阪の書肆河内屋太助に書き与えたごとく、中本ものの「高尾船字文」五長喜画寛政七年刊　などを除けば、半紙本刊読本の処女作である「雪月氷奇縁」五流光斉画享和三年刊　を河内屋太助方より出板して以来、馬琴と大阪の書肆とは近い関係にあり、現今のような献本制のごときものこそなかったであろうが、上方書肆の手から馬琴の手許に渡ることも考えられる。また鬼卵の処女作「昔話猿奇談」五浅山蘆國画文化四年刊　が江戸で出板され、また「半兵衛今昔庚申譚」五閲英斉蘆州画文化九年刊には一九の序文を載せているし、前述弟子入志願の話と合せると鬼卵と江戸の戯作者との交渉は皆無とはいえず、その面からも馬琴の手許に渡る、もしくは噂として「犬猫怪話竹芒太郎」の荒筋ぐらい耳に入るという可能性は存した。しかしこれらは飽くまで可能性としてであって、確証すべくもないのであるが、いずれにせよ八犬伝と同一素材を馬琴より一歩先んじて読本化した功は鬼卵にあったといえる。

しかしながらその作品内容からいえば、非常な懸隔のあるのは争えない事実である。文辞の面からいっても、和漢混淆雅俗折衷の文章で美辞麗句の連続、極めて修辞的技巧に勝った文体についてとかくの論はあるが、絢爛華麗にして朗々誦するに足る馬琴の文辞（注十七）と、主として俗間の講釈師の手を経て成立した実録本の読本

化である上方の絵本ものの風を享けて、平易といえば聞えがいいが事件を平板に並べてつないでいく、といって決して洒落本や滑稽本に見られる写実的という筆致でもなく、極めて類型的語句で綴られていく鬼卵の文辞とは、同じ読本作者の文辞とはいえ一流作者と二流作者の相違とでもいうものが歴然としているのである。

構想の面からいえば、両者の相違は一層顕著となってくる。それは、一方は八犬伝という世界有数の大長編小説であり、一方は五巻五冊という規矩にはまった作品にすぎないといった、言ってみれば量的な差違とは異なった質的な差違が認められるようである。

煩を厭うて両作品に共通する素材の扱い方について、一例だけ比べてみよう。

前述八犬伝の山猫退治の話は、八犬士の一人犬村角太郎を新しく登場させるための趣向であり、八犬伝全体の筋立てからいえば一つの挿話といったものである。ところが、その挿話が極めて巧みに全体の筋立ての中へ組み込まれている。

荒芽山の危難を逃れて他の犬士と別れ別れとなった犬飼現八は、犬士と再会を期して諸国漫遊途路、網苧の茶店で老人に庚申山の怪異をはじめこの挿話に登場する大約の人物関係を聞く、次いで庚申山において山猫の妖怪の左眼を射、赤岩一角の亡霊に会って茶店の老人から聞いた話の因果関係を明され、犬村角太郎に協力して赤岩一角に化した山猫退治を決意するまで、極めてスムースに挿話の中に入っていく。挿話の中では、悪婦として前々から活躍していた船虫が、山猫の化す一角の後妻として再び登場、また第六輯において千葉自胤の逆臣として登場した籠山逸東太が一角の弟子として再登場、八犬伝全体の筋立の中に巧みに組み込んでいる。

そしてこの挿話の山場である、猿神退治の人身御供説話の脱化と思われる雛衣の自害の場に至って、一角の左眼治癒のため胎児を求められた雛衣の胎中より霊玉現われ、霊玉の功徳により山猫の正体暴露され山猫退治に至るのであるが、この霊玉の出現により伏姫自害の際四散した仁義八行の玉と結びつき、八犬伝の全体の筋立に和すのである。馬琴は、第六十六回の末に次のように自讃する。

○吁瑞玉の霊たるや。犬士にあらざれば奇特なし。されば雛衣が呑たる玉は。仇を仆して良人に返しぬ。實に是返璧てふ。地方の字空しからず。亦一奇事といはまくのみ。屁ふに。犬塚信乃が、感得したる。孝の字の霊玉は。初興四郎狗が呑たりしを。その瘡口より顕れたり。又山杜房八が妻。沼藺は。付きとき父の網せし。仁字自生の玉を呑しに。その玉腹に在ること十五年。その子大八の親兵衛が生るゝに及びて。件の玉を掘もてり。然るを人よく知るものなし。親兵衛甫て四才になるとき。初てその掌をひらきしかば。玉は人間に顕れにき。有如之者。彼興四郎狗と沼藺と雛衣が身の中より。玉の顕れ出し事と。呑たる事は違はねども。その趣各々異也。看官これをおもひねかし。

〃山猫の怪談は、聊等類を遁れたるのみ〃と、この挿話に関しては陳腐さを認めつつも、霊玉出現の趣向についての苦心を語っているのである。

しかもこの挿話はこれで終っているのではなく、逸東太・船虫を逃してやることにより

○嗚呼逸東太綏迚は、犬坂毛野が父の讐也。然るを現八角太郎は。この時世に毛野ありて。同因果の犬士たりしを。夢にだも知る

よしなければ。船虫をすら乞ふに任して。放して白井へ還せしは仇の為に刃を借し。盗兒に糧を齎すといふ。古語に似たりとて。後に悔しく思ひしとぞ。かゝる事世に多かるべし。

と、次の展開へ興味をつないでいくのである。大趣向家である馬琴の構想力の豊かさは、やはり認めなくてはなるまい。

一方「犬猫怪話竹些太郎」における化猫退治を見るに、巻二における妖獣の怪に鞍手十内が遇うくだり、妖獣どもが人身御供の少年少女を食する有様を二度摺りの挿絵入りで描写するが、勇士十内は拱手傍観してその強さを示さず、たゞ金輪御前の化猫が竹些太郎の恐ろしさを語るを聞いて太郎探しに出かけるという、民話そのまゝの話になっていて、この挿絵を因果関係を附して筋立全体の中へ組み込むという配慮が極めて稀薄である。

巻五において、佐太郎が猫股屋敷で怪異に遇うくだりも、極めて唐突に語り出されて、筋立全体の中における佐太郎の位置も判らぬまま終ってしまう。回を変えて始めて畑正勝の妻御崎の兄が佐太郎と判明するが、ここではもはや佐太郎は登場しない。猫股屋敷の怪異は全く挿話のままで終ってしまうのである。

それぞれに一脈の筋は通しているのだが、各々の挿話、ひいては趣向を全体的構想のもとに緊密に結びつける、その手段として因果関係を用いるという読本の常道が充分考慮されていず、散漫という評を免れぬ作品となっている。馬琴に比して、鬼卵の構想力不足を云々されても止むを得ないであろう。

鬼卵の読本に見られた素材先取りの功を顕彰するつもりが、結局当時の読本作者の中で馬琴が抜群の作者であったことを証することともなった。これを更に一般化して、展開期読本(注十八)における上方と江戸の読本作者の技倆の違いであり、また両都書肆の興廃の様の反映であるといっていいのかも知れない。

四

「犬猫怪話竹些太郎」以後しっぺい太郎を素材とした作品を気付いただけ挙げてみる。

「本朝悪狐伝」前編五　後編五　岳亭丘山　英斎国貞画　前編文政十二年刊　後編文政十三年刊

読本である。江戸・丁字屋平兵衛、名古屋・永楽屋東四郎、大阪・河内屋長兵衛合板であるが、大阪の売薬広告が巻末に見られ上方の読本であろう。後編巻末に次の文を見る。

○此書もと赤本にとの需に応じてつゞりたるを稿成に及んで書肆又よミ本につゞり替ん叉をねがふ止叉をえず綴り直しぬ然ば巻中くさ〴〵のことどもかきくはへたれば赤本めかしく戯場めきたる処いと多し見る人その拙きを笑ひ玉ふ叉なかれ

忠義名犬佳話五冊これは此書の後へんにて鶴間矢九郎か叉ならびに星の井孝義小竜等が叉窒へき太郎が忠をつくせし叉を詳にしるす

江戸の人岳亭丘山が合巻にと綴ったものを、上方で出板することになって読本としたとでもいうのであろうか。忠義名犬佳話なる読本は出板されていない。よって評判のほども察せられるが、その内容は本朝悪狐伝の題名が示すごとく読本に多くの素材を提供した金毛九尾の狐、退治されて殺生石となるが、その気を享けた狐が玉芝なる美女に化し、一ツ家伝説に附会した話などに絡ませて悪逆を行う筋立である。ところが前編冒頭に〃後漢書南蛮伝に曰く高辛氏……〃と書き始めて搜神記や太平記などに至るまでの諸書に見える犬に関

する説話を記し〃茲に古へより語り伝ふる室壁太郎といふ名犬あり〃と、前編巻四の前半まで室壁太郎の話を展開する。巻四後半から悪狐の話となり後編末に太郎が悪狐退治をすることで終る。しっぺい太郎と悪狐の話を組み合わして筋立としたものだが、二つの話がうまく組み合されていず、読本として上出来とはいえないようである。

ところでこの室壁太郎の話は、猿神退治としてのしっぺい太郎の話が本筋で、いわゆる犬人婚姻譚は見られず、鬼卵の読本はもちろん当時世人にもてはやされて読本界に大きな影響を与えていた八犬伝への顧慮もほとんど見られない。犬より狐に重点があったとすれば、必然そうなったといえようか。忠義名犬佳話なる読本が作られていたら、八犬伝盛行の余波といえるものになっていたかも知れないのであるが。

「昔語室壁太郎」初編～八編　二世春水　初・二編・安政三年
四編・安政五年、五・六・七編　二世国貞画　三編・安政四年
文久元年・八編、文久三年刊

合巻である。前述「本朝悪狐伝」の室壁太郎の話、冒頭北条高時闘犬を好み太郎を愛し、後義貞に亡ぼされる筋立となっているが、この合巻はその部分を拡大再生産したものといえる内容で、八編で未完である。これにも犬人婚姻譚の部分は見られず、八犬伝との関係を云々すべきものではなさそうである。（注十九）

こうしてみると、元来しっぺい太郎の話には犬人婚姻譚部分はなかったのではないかとの推測は一層確実さを増し、鬼卵の犬人婚姻譚と猿神退治の話をないまぜにした思い付の功は、その八犬伝への影響ということはさておき再確認してよかろう。

注一　日本小説書目年表には、
犬猫奇談竹箆太郎五栗杖亭鬼卵　文化六年
とあるが、享保以後江戸出版書目にも
絵本竹箆太郎　全五冊
同年（文化七年）午孟春
栗杖亭鬼卵著
板元　大阪　秋田屋太右衛門
売出　西村源六
とあって、文化七年刊たること明白である。

二　三都六書肆合板であるが、注一引用の享保以後江戸出版書目でも判るごとく、板元は大阪の秋田屋太右衛門であって、その他は出資者もしくは売出し引き受けの書肆であり、上方の読本であることは明かである。

三　阿州・吉田鶴、伝未詳。

四　日本昔話集成第二部本格昔話 3 の二五六猿神退治の項にあげられている類話によれば、相手は猿に限らず、猫、狸、鬼、貉、狒、化物等々多様である。

五　拙稿「読本の分類に関する私見」（近世文芸稿十号）参照。

六　全前。絵本雪鏡談は加賀騒動、絵本金花談は伊達騒動をそれぞれ扱かっている。

七　全前。本格ものという言葉は十分こなれたものではないが、便宜用いた。

八　林美一著「秘板八犬伝」参照

九　近世物の本江戸作者部類巻第二の読本作者部上に〃實に今のよみ本の嚆矢也〃と呼ぶ。これは、本朝水滸伝を読む并批評に

○宝暦明和の間に當りて、かくなが〳〵しき草紙物語を作りたる此綾足はさるものにて、吾ともがらの嚆矢也、

とあるのと照応する。

十　作者部類の中に見える言葉。

十一　日本名著全集・南総里見八犬伝、中。

十二　この庚申山の場面の粉本として、近路行者の「繁野話」巻三の「白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話」を指摘した説がある。（島津久基氏「馬琴論片」）

十三　「大猫怪話竹篦太郎」には、全て栗枝亭鬼卵とあり、京摂戯作者考（続燕石十種第一所収）、戯作者小伝（燕石十種第一所収）にも栗枝亭とある。不詳。

十四　岸得蔵氏「栗杖亭鬼卵の生涯」（静岡女子短大「紀要」第八号）なお鬼卵の狂歌師としての消息については、岸氏に「鬼卵評点狂歌帖『倶毛井濃賀里』『代波井保志』—解説と翻刻—」（静岡女子短期大学国語国文論集・第二集）がある。

十五　拙稿「後期上方説本の系譜—栗杖亭鬼卵を中心として—」国語と国文学S36・4

十六　……然れども自分足れりとせずして、江戸の曲亭主人柳亭子抔へ、戯作の門人たらんことを屢請しといふは、其謙遜の志賞すべし、（京摂戯作者考・鬼卵の項）など。

十七　麻生磯次著「江戸文学と支那文学」後篇・第一章・第一節・文の装飾技法など参照

十八　前出注五拙稿参照

十九　林美一著「秘板・八犬伝」に「昔語堂墨太郎」を八犬伝の類作とされている。

附記・真下三郎先生の御指導と、御蔵書を自由に利用させていただいた中村幸彦先生の御厚意とを感謝いたします。

——広島大学助手——